## 110 『トゥレ・パリジャン』とその仲間　1920年から1936年までのうち

**Très Parisien,** la mode, le chic, l' élégance, (1920-1936), 1920-1925, 1933-1935. Paris, Nilsson. 48vols. 28.0×18.3cm 〈383. 135-T〉
Hiler p. 852

(**108**), (**109**) ほどの高い芸術的評価をうけてはいないものの，大変独特でしかも普遍的であるという点でユニークな位置を占めている。とりわけ，本誌は一貫してトレーシング・ペーパーの薄紙に印刷してポショワール（刷り込み法）で着色したのち台紙に貼るという方式を踏襲しており，こうした方式をとっているのは，このモード誌とその仲間だけなのである。この発想は恐らく，当時のファッション・イラストレーターの中にトレーシング・ペーパーを使って描いてデザインしてくる人がいたことに発するものであろう。その薄紙の効果は，コラージュなどにもみられる一種独特の半調の美しさで，時によっては単調になりがちやポショワールを補うのに十分であった。ただ尚早に黄ばんでしまう点と，紙質が極めてもろいのが欠点である。

文献によると，ポショワールは15世紀のリョンでトランプ作りに用いられており，当時は油を塗った厚紙を切り抜いて型紙としたことが知られている。しかし，20世紀初頭になるとジンク（亜鉛）板やブロンズ板が型紙として用いられるなど，30種以上に及ぶ彩色の手法があったとされる。当時すでに一般化していた網目写真版や全く機械化した大量印刷法に比べると，ポショワールは手づくりである点と，それだけ多大の労力が必要とされることからかも，極めて高質で付加価値の高いものとなったのはいうまでもない。

仲間というのは①『レ・シャポー・デュ〝トゥレ・パリジャン〟』Les chapeaux du "Très Parisien" 1921—1924 〈383. 2 —C〉，②『レジデー・ヌーヴェーユ・ド・ル・モード』Les idées nouvelles de le mode, 1921—1924 〈383.135—I〉，③『レ・クレアシオン・パリジェンヌ』Les créations Parisiennes, 1929—1930 〈383.135—C〉 および④『レ・シャポー・ヌーヴォー』Les chapeaux nouveaux, 1921—1922 〈383. 2 —C〉 などである。

本誌は「すばらしいパリッ子」というほどの意味の月刊紙で，毎月18枚程度のプレートからなっており，下方に文字解説が施されている。これに対する仲間つまりサプルメントの①は婦人帽のための季刊誌で，これにもトレーシング・ペーパーが使われている。

②は本誌の付録として刊行された月刊誌で同じ形式をとっている。（石山）